

# 試論 『正法眼蔵』における仏道の体系(二)

東 隆 眞

## 目次

### 五、「正伝」の仏道

#### 2、「仏道」

仏(過去七仏、釈迦牟尼仏大和尚)と祖師たち(第一祖摩訶迦葉尊者以下歴代の祖師たち)によって正伝されるもの、これが仏の道すなわち仏道である。

しかれば、その仏道の内実は、なにか。

この問題に対する道元禅師の関心は、まず、釈迦牟尼仏大和尚が摩訶迦葉尊者に伝えたところのものは、いったい何であったかという点に集中する。

これに対する解答を、あらかじめ要言すると、釈迦牟尼仏大和尚は、西インド・霊鷲山において、百万の大衆をまえにして、優曇華を拈じて、瞬目し、密語で、正法眼蔵涅槃妙心を示したところ、摩訶迦葉尊者が微笑して領解したのである。このことを契機として、摩訶迦葉尊者は、「仏道」正伝の第一祖となった。これが、「仏道」正伝の宗教的原点である。

そして、優曇華を拈ずるといい、瞬目するといい、密語を話すとい

い、正法眼蔵涅槃妙心を示すといひ、微笑して領解したといひ、それらは、それぞれに『正法眼蔵』独特の個性的意義を帯びている。

はじめに、「正法眼蔵涅槃妙心」について。

これについては、あらためて証文をかかげると、「面授」の巻に、

爾時、釈迦牟尼仏、西天竺国靈山会上、百万衆中、拈優曇華一瞬目、於レ時、摩訶迦葉尊者、破顔微笑、釈迦牟尼仏言、吾有正法眼蔵涅槃妙心、付屬摩訶迦葉一

とある。

ここに示されてある事柄は、直前に述べたとおりのことである。しかも、それは特殊なものではなく、いうところの禪門においては、きわめて一般的に広く知られている文言である。

けだし、靈鷲山における釈迦牟尼仏大和尚の拈華瞬目、摩訶迦葉尊者の破顔微笑が、仏法の付法相承の源流であることは、古来、人のよく知るところである。その経証としては、『大梵天王問仏決疑經』第四卷「拈華品」の一節が引用されるのが通例となっており、いま『正法眼蔵』の「仏道」の巻や「面授」の巻や「嗣書」の巻の文言は、この経文の表現と同一ではないにせよ、主旨はほとんど全くひとしいと言つてよい。

梵王、至靈山以金色波羅花一献花舍身為床坐請仏為衆生說法、世尊登座拈花示衆人天百万悉皆罔措独有金色頭陀破顔微

笑世尊云吾有正法眼蔵涅槃妙心実相無相二分付摩訶迦葉一

右は、「拈華品」の一節であるが、いったい、この『大梵天王問仏決疑經』は、今日の学界では、一一世紀に中国で成立した偽経であるとされている（大修館書店刊『禅学大辞典』下巻、八一六頁～八一七頁）。しかしながら、その説示内容も信ずるに足りぬ経文として捨て去つてよいかどうかは別の問題であろう。經典、論書、祖録の成立ないし思想内容の真偽に独特の鋭い批判と見識をもつ道元禪師が『大梵天王問仏決疑經』の歴史的成立の真偽に一言も触れていないのはなぜか。おそらく、その真偽の如何よりも、そこに説かれてある宗教的眞実を重視したのであろう。道元禪師が、その宗教的眞原をみずから思考し、他に説示するに好都合でもあったのであろう。道元禪師が偽経をもちい、その歴史性に信頼がおけない伝承を根拠として、「正伝」の仏道を主張していると解すべきではない。

さて、「仏道」の巻に示される。

世尊の迦葉大士に付嘱します、吾有正法眼蔵涅槃妙心なり。このほかさらに吾有禅宗付屬摩訶迦葉にあらず

すなわち、釈迦牟尼仏大和尚は、摩訶迦葉尊者に、「正法眼蔵涅槃妙心」を付嘱したのであって、禅宗を付属したのではない。ゆえに、『正法眼蔵』の「仏道」は、「正法眼蔵涅槃妙心」であつて、禅宗ではない。

さて、また、その「正法眼蔵涅槃妙心」とはなにか。ここでは、とりあえず二つの視点から、これを概観的に指摘してみよう。

第一に、釈迦牟尼仏大和尚から摩訶迦葉尊者に付嘱された仏道は、「仏道」の巻によれば、

釈迦牟尼仏の迦葉仏に参学しますがごとく、師資ともに于今有在なり。このゆゑに正法眼蔵まのあたり嫡嫡相承しきたれり。仏法の正命ただこの正伝のみなり。

とあり、

仏仏祖祖付属し正伝するは、正法眼蔵無上菩提なり、仏祖所有の法は、みな仏付属しきたれり、さらに剩法のあらたなるあらず、この道理すなはち法骨道髓なり。

とある。約していえば、「仏法の正命」と表現し「法骨道髓」と表現するところのものである。そして、その内実は、「現成」という表現によって示されるところのものであって、そのことについては、やがて、その項において後述するであろう。

「仏道」の巻は、「仏祖正伝の正法眼蔵涅槃妙心」は、禅宗と称し、禅祖と称し、禅家と称する類の範疇で理解してはならないと強調して、次のようにいう。

仏祖正伝の正法眼蔵涅槃妙心、みだりにこれを禅宗と称す、祖師を禅祖と称す、学者を禅子と号す。あるひは禅和子と称し、あるひは禅家流の自称あり。これみな僻見を根本とせる枝葉なり。

そして、また、正伝の仏道は、『石門林間録』（覚範徳洪述）の習禅や三学、六度、八正道のなかの禅那の類いではなく、また、瀧仰宗、臨済宗、雲門宗、法眼宗、曹洞宗、黄竜宗、仏心宗など、およそ局限化し、相対化したものではないとして、宗名の呼称をことごとく否定した。この弊風は、想起すれば、宋朝禅林の一般的風潮であった。その文証を挙げれば、左のようである。

石門林間録云、菩提達磨、初自梁之魏、經行於嵩山之下、倚仗於少林、面壁燕坐而已、非習禅也、久之人莫測其故、因以達磨為習禅、夫禅那諸行之一耳、何足以尽聖人、而當時之人、以之為史者、又從而伝於習禅之列、使与枯木死灰之徒、為伍、雖然聖人非止於禅那、而亦不違禅那、如下易出乎陰陽而亦不違乎陰陽。

(略) 七仏および二十八代、かならずしも禅那をもて証道をつくすべからず。このゆゑに古先いはく、禅那は諸行のひとつならくのみ、なんぞもて聖人をつくすにたらん、この古先、いささか人をみきたれり、祖宗の堂奥にいれり。(達磨の禅を習禅、禅那の類いとするこ

の否定)

世尊迦葉の会に禅宗の称きこえず、初祖二祖の会に禅宗の称きこえず、五祖六祖の会に禅宗の称きこえず、青原南嶽の会に禅宗の称きこえず、(略)

大宋の近代、天下の庸流、この妄称禅宗の名をききて、俗徒おほく禅宗と称し、達磨宗と称し、仏心宗と称する妄称きほひ風聞して、仏祖をみだらんとす、これは仏祖の大道いまだかつてしらず、正法眼蔵ありとだにも見聞せず、信受せざるともがらの乱道なり、正法眼蔵をしらん、たれか仏道をあやまり称することあらん。〔禅宗、達磨宗、仏心宗などの宗称の否定〕

大瀧山大円禅師は、百丈大智の子なり、百丈と同時に瀧山に住す、いまだ仏法を瀧仰宗と称すべしとはいはず、百丈もなんぢがときより瀧山に住して瀧仰宗と称すべしとはいはず、師を祖と称せず、しるべし妄称ということ。(略)

大瀧の道取する一言半句、かならずしも仰山と一条拄杖兩人昇せず、宗の称を立せんとし、瀧山宗といふべし。大瀧宗といふべし、瀧仰宗と称すべき道理いまだあらず。

瀧仰宗と称すべくば、兩位の尊宿の在世に称すべし、在世に称すべからんを称せざらんは、なにのさはりによりてか称せざらん、すでに兩

位の在世に称せざるを、父祖の道を違して瀧仰宗と称するは、不孝の児孫なり。(瀧仰宗称の否定)

(臨濟義玄は) 黄檗のころを究尽せずといへども、相承の仏法を臨濟宗となづくべしといふ一句の道取なし、半句の道取なし。豎拳せず、拈拏せず、しかあるを門人のなかの庸流、たちまちに父業をまもらず、仏法をまもらず、あやまりて臨濟宗の称を立す。(略)

臨濟將<sub>レ</sub>示<sub>レ</sub>滅、属<sub>三</sub>三聖慧然禅師<sub>二</sub>云、吾遷化後、不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>滅<sub>三</sub>却<sub>二</sub>吾正法眼蔵<sub>一</sub>、慧然云、争敢滅<sub>二</sub>却<sub>一</sub>和尚正法眼蔵、臨濟云、忽有<sub>レ</sub>人間<sub>レ</sub>汝、作麼生对、慧然便喝、臨濟云、誰云吾正法眼蔵、向<sub>三</sub>這瞎驢<sub>二</sub>辺<sub>一</sub>滅却。

かくのごとく師資道取するところなり。臨濟いまだ吾禅宗を滅却することえざれといはず。吾臨濟宗を滅却することえざれといはず。ただ吾正法眼蔵を滅却することえざれといふ、あきらかにしるべし仏祖正伝の大道を、禅宗と称すべからず、臨濟宗と称すべからずといふことを。さらに禅宗と称することゆめゆめあるべからず。たとひ滅却は正法眼蔵の理象なりとも、かくのごとく付属するなり、向<sub>三</sub>這瞎驢<sub>二</sub>辺<sub>一</sub>滅却、まことに付属の誰知なり、臨濟門下にはただ三聖のみなり、法兄法弟におよぼし、一列せしむべからず、まさに明窓下安排なり、臨濟三聖の因縁は仏祖なり、今日臨濟の付属は、昔日靈山の付属なり、しかあれば臨濟宗と称すべからざる道理あきらけし。(臨濟宗称の否定)

雲門山匡真大師、そのかみは陳尊宿に学す、黃檗の児孫なりぬべし、のちに雪峰に嗣す、この師また正法眼蔵を雲門宗と称すべしといはず、門人また滄仰臨済の妄称を妄称としらず、雲門宗の称を新立せり。(雲門宗称の否定)

清涼院大法眼禪師は、地藏院の嫡嗣なり。玄沙院の法孫なり。宗旨あやまりなし。大法眼は署する師号なり。これを正法眼蔵の号として、法眼宗の称を立すべしといへることを、千言のなかに一言なし、万句のうち一句なし、しかあるを門人また法眼宗の称を立す。法眼もしいまを化せば、いまの妄称法眼宗の道をけづるべし。(法眼宗称の否定)

洞山大師、まさに青原四世の嫡嗣として、正法眼蔵を正伝し、涅槃妙心開明す。このほかさらに別伝なし、別宗なし。大師かつて曹洞宗と称すべしと示衆する拳頭なし。瞬目なし。また門人のなかに庸流まじはらざれば、洞山宗と称する門人なし。いはんや曹洞宗といはんや。曹洞宗の称は、曹山を称しくはふるならん。もししかあらば雲居同安をもくはへのすべきなり。雲居は人中天上の導師なり。曹山よりも尊崇なり。はかりしりぬ、この曹洞の称は、傍輩の臭皮袋、おのれに齊肩ならんとて、曹洞宗の称を称するなり。(曹洞宗称の否定)

あるひは黄竜の南禪師の一派を称して黄竜宗と称きたれりといへども、その派とほからずあやまりをしるべし。(黄竜宗称の否定)

釈迦牟尼仏大和尚は、いかなる宗名も称呼せず、標榜しなかつた。

「釈迦牟尼仏ひろく十方仏土中の諸法実相を拵拵し、十方仏土中をとくとき、十方仏土のなかに、いづれの宗を建立せりととかず」。しいて言え、法(真理)、すなわち「正法眼蔵涅槃妙心」とするのみであった。そのことは、中国にやつて来た達磨大師においても、同様である。更にいへば、滄山も仰山も滄仰宗を称えず、臨済も臨済宗を称えず、雲門も雲門宗を称えず、法眼も法眼宗を称えず、洞山も洞山宗、曹洞宗を称えない。宗名を称えているのは、それぞれの祖師たちの愚かな亜流たちにすぎない。黄竜慧南の一派を黄竜宗と称えているけれども、とおからずその誤りを知るであろう。

道元禪師によれば、正法眼蔵涅槃妙心の仏道が五家七宗に宗派化したのは、目のあたりにした宋朝禪林においてもっとも盛んであったのであった。その宋朝禪林のなかで、このような風潮に批判的態度を示したのは、実に天童山景德寺の如浄であった。道元禪師によれば、「先師(如浄)ひとり」のみであった。如浄における宗派化した禪仏法の否定を学んではじめて道元禪師は、宗名呼称の非を知ったのであった。すなわち、言う。

先師古仏上堂。示衆云。如今箇箇祇管道雲門法眼滄仰、臨済曹洞等家風有別者。不<sub>レ</sub>是<sub>レ</sub>仏法一也。不<sub>レ</sub>是<sub>レ</sub>祖師道一也。

この道現成は、千歳にあひがたし。先師ひとり道取す。十方にききがたし。円席ひとり聞取す。

しかあれば、一千の雲水のなかに、聞著する耳聒なし、見取する眼睛なし。いはんや心を挙してきくあらんや。いはんや身処に聞著するあらんや。たとひ自己の渾身心に聞著する、億万劫にありとも、先師の通身心を拵括して、聞著し、証著し、信著し、脱落著するなかりき。

(略)

先師古仏を礼拝せざりしときは、五宗の玄旨を参究せんと擬す、先師古仏を礼拝せしよりのちは、あきらかに五宗の乱称なるむねをしりぬ。

それゆえ、真に学道を志す者は、けっして五家の宗名の乱称などを念頭においてはならない。いわゆる五家の家風など記憶する必要もない。

したがって、祖師たちの機関として知られる臨済の三玄、三要、四料簡、四照用(『臨済録』、『会元録』)浮山の章に見える九帯、汾陽善昭の章に見える十同真智、雲門の三句、洞山の五位などを記憶しておく必要もない。そもそも「釈迦老子の道、しかのごとくの少量ならず」。釈迦老師の道は、広大である。

雲箇、水箇、真箇の参究を求覓せんは、切忌すらくは五家の乱称を記持することなかれ、五家の門風を記号することなかれ、いはんや、三玄、三要、四料簡、四照用、九帯等あらんや、いはんや、三句、五位、十同真智あらんや。

大師釈尊靈山会上にして、法を迦葉につけ、祖々正伝して、菩提達磨尊者にいたる。尊者みづから神丹国におもむき、法を慧可大師につけき。これ東地の仏法伝来のはじめなり。

かくのごとく単伝して、おのづから六祖大鑑禪師にいたる。このとき真実の仏法、まさに東漢に流演して、節眼にかかはらぬむねあらはれき。ときに六祖に二位の神足ありき。南嶽の懷讓と青原の行思となり。ともに仏印を伝持して、おなじく人天の導師なり。

その二派の流通するに、よく五門ひらけたり。いはゆる法眼宗、滂仰宗、曹洞宗、雲門宗、臨済宗なり。見在大宋には、臨済宗のみ天下にあまねし。五家ことなれども、ただ一仏心印なり。(『辨道話』)

このように宗派、宗名を徹底的に拒けることを力説し、一仏心印を強調する道元禪師のめざすところはいったいなにか。それは、つまるところ、道元禪師における釈尊へのひたすらなる敬仰である。ひたすらなる見仏聞法の思慕である。宗派、宗名以前の仏道への回帰であり、宗派、宗名以前の仏道の実現である。その思いを切々とつづつて、「仏道」の巻は結んである。

世尊在世に一毫もたがはざらんとする、なほ百千万分の一分におよばざることうれへ、およべるをよろこび、違せざらんをねがふを、遺弟の畜念とせるのみなり。

これをもて多生の値遇奉觀をちぎるべし、これをもて多生の見仏聞法

をねがふべし。ことさら世尊在世の化儀にそむきて、宗の称を立せん、如来の弟子にあらず、祖師の児孫にあらず、重逆よりもおもし。

(略)

しかあればすなはち、学仏の道業を正伝せんには、宗の称を見聞すべからず。仏祖、付属し正伝するは、正法眼蔵、無上菩提なり、仏祖所有の法は、みな仏付属しきたれり、さらに剩法のあらたなるあらず、この道理、すなはち法骨道髓なり。

第二に、「正法眼蔵涅槃妙心」を、「密語」と表現して「密語」の巻に示し、また「優曇華」と表現して「優曇華」の巻に説き、「古鏡」と表現して「古鏡」の巻にする。それぞれの巻は、より一層、『正法眼蔵』における道元禪師の「正法眼蔵涅槃妙心」を特色づけていく。特色づけていくと言っても、それは、より思想化し、より特殊化し、より閉鎖化していくのではない。むしろ、逆に「正法眼蔵涅槃妙心」の「正法眼蔵涅槃妙心」たるゆえんを深め、広げていくと言った方がよいかも知れない。歴史的信憑性を否定されている『大梵天問仏決疑経』に依拠したとされる「正法眼蔵涅槃妙心」が、道元禪師によって息吹きをかけられて、蘇生し、活性化し、顕現化したと言っても過言ではあるまい。

はじめに、「密語」。

いったい、密語の密には、内密、秘密の意と親密、緻密の意とがある。一般には、広く前者の意が用いられる。しかし、道元禪師は、「密語」巻を書いて、後者の意を強調する。

すなわち、

いはゆる密は、親密の道理なり。

とある。密とは親密の密であり、したがって密語とは、親密の語の意となる。

ところで、その密語ということが、釈迦牟尼仏大和尚と摩訶迦葉尊者とのあいだで仏道が正伝されるについて、なぜとりあげられたのか。それは、密語に対する誤解を拒け、密語の真義を明らかにすることである。正伝の仏道、仏道の正伝を明確にすることである。

道元禪師は、雲居山の弘覚大師（雲居道膺大和尚）と、さる役人との問答をあげて、これを評釈する。

まず、役人が問うて、

「世尊（釈迦牟尼仏大和尚）には密語があり、この密語には摩訶迦葉尊者には覆われていない（ここでは、分っている、理解されている、の意か）といいますが、世尊の密語とは、いったい何でしょうか」という（原文は、「世尊有<sub>二</sub>密語<sub>一</sub>、迦葉不<sub>二</sub>覆蔵<sub>一</sub>、如何是世尊密語」とある）。

ときに、大師はよびかけた。

「尚書（大臣の官職）さん」

その役人は、返事をした。

大師は、言った。

「わかりましたか」

「わかりません」  
と役人はこたえた。

そこで、大師は、

「もし、君がわからなければ、それが、つまり、世尊の密語である。

もし、君が分れば、それが、とりもなおさず、摩訶迦葉尊者の分った  
ということである」と言った。

こういう問答である。「密語」の巻は、この商量を紹介して、密語を  
評釈する。

この一段事の密語の現成なる、ただ釈迦牟尼世尊のみ密語あるにあら  
ず、諸仏祖みな密語あり。

すでに世尊なるは、かならず密語あり。密語あれば、さだめて迦葉不  
覆蔵なり。

百千の世尊あれば、百千の迦葉ある道理をわすれず参学すべきなり。

参学すといふは、一時会取せんとおもはず、百回千回も審細功夫し  
て、かたきものをきらんと経営するがごとくすべし。かたる人あらば  
たちどころに会取すべしとおもふべからず。いま雲居山すでに世尊  
ならんに、密語そなはり、不覆蔵の迦葉あり。喚ニ尚書、書ニ応諾はす  
なはち密語なりと参学することなかれ。大師ちなみに尚書にしめすに  
いはく、汝若不会、世尊密語汝若会、迦葉不覆蔵、いまの道取、かな  
らず多劫の弁道功夫を立志すべし。なんぢもし不会なるは世尊の密語  
なりといふ。いまの茫然とあるを不会といふにあらず。不知を不会と

いふにあらず。なんぢもし不会といふ道理、しづかに参学すべき処分  
を聴許するなり。功夫弁道すべし。さらにまた、なんぢもし会ならん  
はと道取する、いますでに会なるとにはあらず。

右は、いささか長文に過ぎる引用の本文であるが、要を取って言え  
ば、そもそも、密語は釈迦牟尼仏大和尚のみにあるのではなく、もろも  
ろの仏祖たちには、必ず密語があるのである。密語そのものなのであ  
る。そういうあり方において、世尊に密語があれば、摩訶迦葉にそれ  
に  
関する親密なる理解があるのである。仏であり祖である両者は、打てば  
響く関係なのである。いま、雲居道膺は、百千の世尊の一人であり、も  
ろもろの仏祖の一人であるから、密語があるのである。が、雲居道膺が  
「尚書よ」とよびかけて、尚書が返事をした、そのところが密語だと思  
ったならば、それは誤解である。雲居道膺が、尚書に、「もし、君が分  
らなければ、それが、つまり、世尊の密語である。もし、君が分れば、  
それが、とりもなおさず、摩訶迦葉尊者の分ったということである」と  
言ったが、「もし、君が分らなければ」という、その「分らなければ」  
というの、ぼんやりしたり、ただ知らないのをそう言っているのでは  
ない、「しづかに参学せよ」という意味なのである、という。

ふたたび、靈山において、百万の大衆をまえに釈迦牟尼仏大和尚が摩  
訶迦葉尊者に、拈華瞬目した故事に関して、密語の一般的誤解の指摘を  
とりあげてみよう。



かれらみだりにいはく、世尊有密語とは、靈山百万衆前に拈華瞬目せしなり。そのゆゑは、有言の仏説は淺薄なり、名相にわたれるがごとし。無言説にして拈華瞬目する、これ密語施設の時節なり、百万衆は不得領覽なり。このゆゑに、百万衆のために密語なり。迦葉不覆蔵といふは、世尊の拈華瞬目を、迦葉さきよりしれるがごとく破顔微笑するゆゑに、迦葉におほせて不覆蔵といふなり。これ真訣なり、箇箇相伝しきたれるなり。

これをききてまこととおもふともがら、稻麻竹葦のごとく、九州に叢林をなせり。あはれむべし、仏祖の道の破廢せること、もととしてこれよりおこる。明眼漢まさに一一に勘破すべし。

釈迦牟尼仏大和尚の靈山会上における拈華瞬目は、言葉による説法ではない。これは、言葉による説法よりもすぐれている。言葉による説法ではないところを密語というのである。このとき、摩訶迦葉尊者をのぞく他の大衆は理解することが出来なかつた。理解出来なかつたからこそ、密語なのである。また、釈迦牟尼仏大和尚の拈華瞬目を摩訶迦葉尊者は、すでにあらかじめ分かっていたかのように破顔微笑したといっている。これが、宋朝禅林の昨今に横行する邪解である。

実際、道元禪師は、経論や経論の学習を軽視ないし無視した悪しき宋朝禅の風潮を、換言すれば教外別伝ないし直指人心見性成仏の思想を批判して、次のように記している。

ある漢いはく、釈迦老漢かつて一代の教典を宣説するほかに、さらに上乘一心の法を摩訶迦葉に正伝す。嫡嫡相承しきたれり。しかあれば教は赴機の戯論なり、心は理性の真実なり。この正伝せる一心を、教外別伝といふ。三乗十二分教の所談にひとしかるべきにあらず。一心上乘なるゆゑに、直指人心見性成仏なりといふ。この道取いまだ仏法の家業にあらず、出身の活路なし、通身の威儀あらず。（「仏教」）

もっとも、道元禪師は教外別伝と教禅一致を統一した結果、教禅対立以前の仏道の立場、禅の源流に帰ることを狙いとされた（鏡島元隆博士著『道元禪師と引用經典・語録の研究』八七頁―一一七頁）が、なかならず教外別伝不立文字直指人心見性成仏などの標語によって道元禪師の仏道を理解したとする一般的傾向はいまも跡を断たない。たとえば、最近も次のような文章を目にした。

道元の禅思想の特徴は「不立文字・教外別伝」（経論の文字にとらわれずに直観的に真理をつかむ）、「直指人心・見性成仏」（人間に本来そなわっている仏の本性にめざめる）の標語に集約される。座禅により自力で悟りをひらこうというものである。（榊利夫著『宗教と歴史の進歩』一〇三頁―一〇四頁。一九九〇年、新日本出版社刊）

道元禪師の仏道を一般的な禅の概念で括ってしまったてはならない。もし、そうすれば、道元禪師の仏道の誤解、曲解へとつながってゆくこと

になる。

「吾有正法眼蔵涅槃妙心、付屬摩訶迦葉」といふ、これは、「有言なりや、無言なりや」。もし、釈迦牟尼仏大和尚が、有言を拒け、無言を優先して、拈華を愛したのであれば、摩訶迦葉尊者はもちろん、他の大衆もきつと理解しえたであろう。かくて、道元禪師は、教外別伝、不立文字を、批判しているものようである。「正法眼蔵涅槃妙心」とはいふが、それに続けて「教外別伝、不立文字、直指人心、見性成佛」と言わないのが道元禪師である。換言すれば、道元禪師にとつて、釈迦牟尼仏大和尚と摩訶迦葉尊者の出会い、交わりは、秘すべき特殊な出来事ではなく、万人に開かれた拈華瞬目であり、破顔微笑であり、密語であり、不覆蔵であったのである。すなわち、言う。

信行、法行のともがら、有仏祖処に化をかうぶり、無仏祖処に化にあづかるなり。百万衆かならずしも拈華瞬目を拈華瞬目と見聞せざらんや。迦葉と齊肩なるべし、世尊と同生なるべし。百万衆と同参なるべし。同時発心なるべし。同道なり、同国土なり。

鈍根、利根を問わず、有仏、無仏のいずれのところにおいても教化を蒙むり、拈華瞬目を拈華瞬目としてうけとめ、百万の大衆が百万の大衆とともに、同時に発心し、同じ国土に到る。かくて、すべては、親密なる密の世界となる。

人にあふ時節、まさに密語をきき、密語をとく。おのれをしるとき、密行をしるなり。いはんや、仏祖よく上来の密意、密語を究弁す。しるべし、仏祖なる時節、まさに密語、密行きほひ現成するなり。いはゆる密は、親密の道理なり。無間断なり、蓋仏祖なり、蓋汝なり、蓋自なり。蓋行なり。蓋代なり。蓋功なり。蓋密なり。密語の密人に相逢する、仏眼也覷不見なり。密行は自他の所知にあらず。密我ひとり能知す。密他おのおの不会す。密却在汝辺のゆゑに、全靠密なり、一半靠密なり。

人と人が出会い、仏祖と仏祖が契合するのは、密語によつてはじめて成立する。「おのれをしるとき、密行をしるなり」。このような親密の密は、時間的にも空間的にも隙間がない。仏祖も、汝も、自己も、さては、その他のものも、すべては、すっかり密で蓋われている。密ならざるものはない絶対密の世界である。密さえも密で蓋われている。そのことは、密なる我がよく知っている。その消見は、「密語の密人に相逢する、仏眼也覷不見なり」、すなわち、密語が密人に逢うたといふべく、そこは仏の眼をもつてしてもうかがい知れないものがある。

これを摩訶迦葉尊者の不覆蔵におきかえてみると、

すでにこれ不覆蔵なり、無処不覆蔵ならん正恁麼時、こころみに参究すべし

となる。釈迦牟尼仏大和尚の密語は、摩訶迦葉尊者の不覆蔵と呼応する。すべては密語でないものはない。それゆえ、すべては、不覆蔵でないものはない。すべて覆蔵するところはない。どこにも覆蔵されないの、あらわすのといったことはありえない。とすれば、そのときはどうするか、こころみに参究せよ、という学び方もあるのである。

次に、「優曇華」。

優曇華とは、インド、スリランカなどに分布するクワ科の常緑高木。

一般に、仏教では、三千年に一度開く瑞兆の花とされ、また、仏の出現に逢うことの稀れであることをあらわす。

いま、「優曇華」の巻でも、また、さきの『大梵天王問仏決疑經』第四卷「拈華品」の一節にちなんで、正伝の仏道が説かれる。

「優曇華」は、いうまでもなく、靈山の百万の大衆のまえにおいて釈迦牟尼仏大和尚が拈華瞬目し、摩訶迦葉尊者が破顔微笑した故事にもとずく。

靈山百万衆前、世尊拈優曇華瞬目、于時摩訶迦葉破顔微笑、世尊云、我有正法眼蔵涅槃妙心、付屬摩訶迦葉

「優曇華」の巻は、比較的短編ではあるが、その内容は多様性に富む。直接に優曇華を説くというよりは、拈優曇華すなわち拈華を示す。拈華を論じ、瞬目を語り、弄精魂をとりあげ、先師如浄の語にちなんで梅華、桃華にも言及している。

「優曇華」の巻は、まず華が華であること、これを基底にして、そのうえで華が華を拈ずる。対を絶した華の消息を述べる。その華は、その拈華は、かの釈迦牟尼仏大和尚の拈華だけを文字どおりに解釈するだけではない。それを踏まえて、この「優曇華」の巻の拈華は、さらに縦横無尽に飛躍し、展開される。すなわち、拈華は、梅華であり、春華であり、雪華であり、蓮華であり、三百六十余会であり、五千四十八巻であり、三乗十二分教であり、三賢十聖である。一華開五葉であり、結果自然成であり、はたまた腰雪断臂であり、礼拝得髓であり、石碓米白であり、夜半伝衣などなどである。

いはゆる拈華といふは、華拈華なり。梅華、春華、雪華、蓮華等なり。いはくの梅華の五葉は、三百六十余会なり、五千四十八巻なり、三乗十二分教なり、三賢十聖なり。これによりて、三賢十聖およぼざるなり。大蔵あり、奇特あり、これを華開世界起といふ、一華開五葉、結果自然成とは、渾身是已掛渾身なり。桃葉をみて眼睛を打失し、翠竹をきくに耳処を不現ならしむる、拈葉の而今なり。腰雪断臂、礼拝得髓する華自開なり。石碓米白、夜半伝衣する、華已拈なり。これら世尊手裏の命根なり。

これを、自己に引き寄せていえば、

生死去来も、はなのいろいろなり、はなの光明なり。いまわれらが

くのごとく参学する、拈華来なり。  
となる。

生と死、その去来は、華のすがたのさまざまであり、はなの光明である。このように学ぶのもまた、華を拈ずる風光である。

このように、拈華は、葉が華であるよりは、華が華を拈ずることの意である。華が華の機能を自発的に展開することが拈華であって、その拈華はあらゆることからして現成するのである。

それゆえ、この「優曇華」の巻の華ないし拈華は、くりかえすが、釈迦牟尼仏大和尚の拈華瞬目に限定せず、しかし、ここに端を発して、より普遍的な永遠的な生命活動の躍動として転じられてゆくのである。

おほよそ拈華は、世尊成道より已前にあり、世尊成道と同時なり、世尊成道よりものちにあり。これによりて華成道なり。拈華はるかにこれらの時節を超越せり。

というのは、この間の消息を表現したのである。  
そして、また、

いく拈華も面の嬌嬌なり。

と書いて、いつでも拈華のときに、仏道が嬌嬌に正伝され、実現したといふ。

さて、また、釈迦牟尼仏大和尚の拈華といえは、つづいて瞬目となる。釈迦牟尼仏大和尚の瞬目は、しかし、その拈華にはかならない。拈華そのものなのである。拈華あつての瞬目であり、瞬目あるがゆえの拈華である。

そのとき、摩訶迦葉尊者の破顔微笑となる。同時に、われわれの迷妄なる眼睛は失われてしまった。釈迦牟尼仏大和尚も摩訶迦葉尊者も、その他生きとし生けるすべて拈華となる。正伝の仏道は、このようにして実現し、仏道の正伝は、このようにして成立する。

釈迦牟尼仏大和尚が、「吾有正法眼蔵涅槃妙心」といい、「付属摩訶迦葉」といった、この「吾有」と「付属」とは、直結するのである。

なお、また、拈華は、達磨大師が西方インドから中国に渡来したことでもある。いいかえると、拈華は、弄精魂のことである。只管打坐して、身心脱落することである。着衣、喫飯し、仏殿で相見し、僧堂で相見することも、そのほかあらゆることは弄精魂である。

先師如浄の梅華、桃華にまつわる漢詩をとりあげて、いわゆる優曇華ばかりが優曇華ではない、釈迦牟尼仏大和尚の眼睛は、梅華であり、桃華であると、重ねて強調する。

次に、「古鏡」。

「古鏡」の巻は、「古鏡」を用いて、正伝の仏道の道理を示していると考えられる。

この巻の冒頭に、

諸仏諸祖の受持し単伝するは、古鏡なり。

とある。諸仏、諸祖たちが受持し、単伝するのは、古鏡であるという。この古鏡は、仏道の象徴的表現である。とはいふものの、「古鏡」のその「鏡」に意味があるが、あえて「古」の字を冠するのは、正伝の仏道の歴史的伝統性を尊重する含意であろうか。

「古鏡」の巻は、直前の文に続いて、

同見同面なり、同像同鑄なり、同参同証す。胡来胡現、十万八千、漢来漢現、一念万年なり。古来古現し、今来今現し、仏来仏現、祖来祖現するなり。

と示す。

「古鏡」という文字を使って表わそうとする正伝の仏道は、今日の言葉におきかえてみると、仏道の普遍性、不変性、無限性、無我性をそなえていると見られる。しかも、そのゆえに、「古鏡」は、その機能を具体的に發揮することにおいてのみ「古鏡」たりうる。このとき、必ず現実の個人とともに活動するのである。

その具体的な様子を、インド、中国、日本の先例に求めて挙示している。

すなわち、インドの正伝第一八祖伽耶舎多尊者、中国の正伝第三三祖大鑑禪師をはじめ南嶽大慧禪師、雪峰真覺大師、玄沙禪師、三聖院慧然

禪師、国泰院弘瑠禪師、馬祖道一禪師、南嶽懷讓禪師などの禅僧たちと中国古代の黄帝や唐の太宗など、日本の神代より伝わる三枚の鏡などをとりあげて、これらを道元禪師一流の立場から評釈している。よって、ここに、その一例を掲げて、道元禪師が、「古鏡」によって表わそうとしている仏道の功德をうかがうことにしよう。

まず、インドの伽耶舎多尊者についてであるが、この尊者は生れた時から一般とは異なる点があった。生れた時、すでに一つの円鑑を所持していた。円鑑とはまるい鏡のことである。尊者の誕生と同時に、円鑑がどこからともなくあらわれて、その身辺にあった。そして、尊者の行動と円鑑とは常に一致していた。また、この円鑑を通してあらゆる過去の事蹟や、さまざまな世界のことは、より一層明らかになった。しかし、尊者が出家した時から、円鑑は出現しなくなった。

ある時、尊者は第一七祖僧伽難提尊者に会った。第一七祖は、「君が手にたずさえているのは、なんの印か」とたずねた。「諸仏の大きいなる円鑑は、その内外ともに翳りがなく、二人がともに見ることが出来て、その心眼はたがいにあい似ている」とこたえた。そこで、道元禪師は、尊者は、円鑑の光明によって誕生したとなし、諸仏は円鑑に至り、円鑑にまみえるという。諸仏は、この円鑑の鑄像であるとする。さらに、解説が加えられる。

大円鑑は、智にあらず理にあらず、性にあらず相にあらず、十聖三賢等の法のなかにも、大円鑑の名あれども、いまの諸仏の大円鑑にあら

ず、諸仏ならずしも智にあらざるがゆゑに。諸仏に智慧あり、智慧を諸仏とせるにあらず。参学するべし。智を説著するは、いまだ仏道の究竟説にあらざるなり。

すでに諸仏大円鑑、たとひわれと共生せりと見聞すといふとも、さらに道理あり。いはゆるこの大円鑑、この生に接すべからず、他生に接すべからず。玉鏡にあらざらず銅鏡にあらざらず、肉鏡にあらざらず髓鏡にあらざらず。

円鑑の言偈なるか、童子の説偈なるか。童子この四句の偈をとくことも、曾人に学習せるにあらず。曾或從経卷にあらず、曾或從知識にあらず、円鏡をささげてかくのごとくとなり。師の幼稚のときより、かがみにむかふを常儀とせるのみなり。生知の辨慧あるがごとし。大円鑑の童子と共生せるか、童子の大円鑑と共生せるか。まさに前後生もあるべし。

大円鑑はすなはち諸仏の功德なり。このかがみ、内外にくもりなしといふは、外にまつ内にあらず、内にくもれる外にあらず。面背あることなし、両箇おなじく得見あり。心と眼とあひにたり。相似といふは、人の人にあふなり。たとひ内の形像も、心眼あり、同得見あり。たとひ外の形像も、心眼あり、同得見あり。いま現前せる依報正報、ともに内に相似なり、外に相似なり。われにあらず、たれにあらず、これは兩人の相見なり。兩人の相似なり。かれもわれといふ、われもかれとなる。

心と眼と皆相似といふは、心は心に相似なり。眼は眼に相似なり。相似は心眼なり。たとへば、心眼各相似といはんがごとし。いかならん

かこれ心の心に相似せる、いはゆる三祖、六祖なり。いかならんこれ眼の眼に相似なる、いはゆる道眼被<sub>レ</sub>眼礙<sub>二</sub>なり。

いま師の道得する宗旨かくのごとし。これはじめて僧伽難提尊者に奉觀する本由なり。この宗旨を拵拵して、大円鑑の仏面祖面を参学すべし。古鏡の眷屬なり。

いったい、いま大いなる円鑑とはなにか。それは、いうところの大円鏡智ではない。智は仏道の究極ではない。諸仏の功德なのである。

大いなる円鑑は、大円鏡智ではないばかりか、智や理や性や相など、およそ仏法の法相名目によって概念化出来るものではない。このような重なる否定的表現は、対象に限りなく接近し、契合しようとする努力を示す。

そこで、大いなる円鑑は諸仏の功德というのであるが、その鏡は、内外ともに曇りがなく、外に対する内でもなく、内のくもった外のことでもなく、表裏があるのではなく、その両面がともに見えるのである。

とりわけ、いま心と眼との課題であるが、心と眼は、心は心であり、眼は眼であり、相互に交わり、両方が相似している。それは、あたかも、人が人に会うのである。およそ、こういう次第で、道元禪師は、古聖の故事にちなんで、その宗教的世界を限りなく豊かにふくらませ、自由自在な心の哲学的究明を遂げる。

そのことは、次の場合にも妥当する。中国の第三三祖大鑑慧能禪師の偈として知られる「菩提本無<sub>レ</sub>樹、明鏡亦非<sub>レ</sub>台、本来無<sub>レ</sub>一物、何処有<sub>二</sub>

塵埃」をとりあげる。この偈のなかに明鏡の語がある。

この明鏡を解いて

大鑑高祖の明鏡をしめす。本来無一物、何処有塵埃なり、明鏡非台、これ命脈あり、功夫すべし。明明はみな明鏡なり。かるがゆえに、明頭来明頭打といふ。いづれのところにあらざれば、いづれのところなし。いはんやかがみにあらざる一塵の尽十方界にのこれらんや。かがみにあらざる一塵の、かがみにのこれらんや。しるべし。尽界は塵刹にあらざるなり。ゆゑに古鏡面なり。

と書いてある。知られるとおり、大鑑慧能禪師は、中国の第六祖であり、仏道を中国に定着させた最初の人として尊崇され、道元禪師もとくに高祖と称えて敬意を表している。この大鑑禪師にこの偈ありとして人口に膾炙している一句をとりあげる。すなわち「明鏡」の語である。「明鏡」とは本来無一物のことであり、何処有塵埃のことにほかならぬ。ここに、仏祖正伝の命脈がある。仏祖の世界がある。

道元禪師は、中国の祖師ばかりではなく、俗人の例も掲げている。すなわち中国古代の黄帝である。そして、唐の太宗である。次に引いてみよう。

黄帝のとき、十二面の鏡あり。家訓にいはく、天授なり。また広成子の崆峒山にして与授せりけるともいふ。

その十二面のもちある儀は、十二時に時時に一面をもちある、また十二年に毎月毎面にもちある。十二年に年年面にもちある。

いはく、鏡は広成子の經典なり。黄帝に伝授するに、十二時等は鏡なり。これより照古照今するなり。十二時もし鏡にあらずよりは、いかでか照古あらん。十二時もし鏡にあらずば、いかでか照今あらん。いはゆる十二時は十二面なり、十二面は十二鏡なり、古今は十二時の所使なり。この道理を指示するなり。これ俗の道取なりといへども、漢現の十二時中なり。

軒轅黄帝膝行進<sub>二</sub>崆峒<sub>一</sub>、問<sub>二</sub>道乎広成子<sub>一</sub>、于<sub>レ</sub>時広成子曰

鏡是陰陽本、治身長久、自有三鏡、云天、云地、云人、此鏡無視無聽、抱神以靜、形將<sub>二</sub>自正<sub>一</sub>、必靜必清、無<sub>レ</sub>勞<sub>二</sub>汝形<sub>一</sub>、無<sub>レ</sub>搖<sub>二</sub>汝精<sub>一</sub>、乃可<sub>二</sub>以長生<sub>一</sub>

むかしはこの三鏡をもちて、天下を治し、大道を治す。この大道にあきらかなるを、天地の主とするなり。俗のいはく、太宗は人をかがみとせり、安危理乱、これによりて照悉するといふ。三鏡のひとつをもちあるなり。

人を鏡とするとききては、博覧ならん人に古今を問取せば、聖賢の用舎をしりぬべし、たとへば魏徴をえしがごとく、房玄齡をえしがごとくしとおもふ。これをかくのごとく会取するは、太宗の人を鏡とすると道取する道理にはあらざるなり。

人を鏡とすといふは、鏡を鏡とするなり、己を鏡とするなり、五行を鏡とするなり、五常を鏡とするなり、人自の去来を見るに、来無<sub>レ</sub>迹

去無<sub>レ</sub>方を人鏡の道理といふ。

賢不肖の万般なる、天象に相似なり。まことに経緯なるべし。人面鏡面、日月面なり、五嶽の精および四瀆の精、世をへて四海をすます、これ鏡の慣習なり。人物をあきらめて経緯をはかるを、太宗の道といふなり。博覧人をいふにはあらざるなり。

またまた長文の引用になつてしまつたが、まず黄帝の所有する十二面の鏡は、時間を意味する。それは古今を照らし、漢人が来れば漢人を現する鏡である。時間として成り立たせている道理としての時間であり、多様な現象として現出している時間でもある。時間の本質を指向しているといつてもよいような時間である。躍動的な時間である。

また、広成子のいう鏡は、陰陽の根本である。一般には感覚にうたえて視たり聴いたりすることは出来ない。この鏡は、具体的には天地人の三鏡となる。この三鏡で天下、大道を治めるのである。

唐の太宗は、三鏡のうちの人を鏡として使用して天下の治乱を知つたという。

人を鏡とするとは、鏡を鏡とすることであり、自己を鏡とすることであり、天地の動きを鏡とすることであり、人の道のありよう、人の去来するさまを鏡とするのである。そのほか、さまざまのものを鏡とするのである。言いかえると、すべてのものを鏡とする。鏡でないものはない。それゆえ、太宗が人を鏡とするということは、博覧の人を登用して古今東西の情報を得るといふことではないのである。

次に、日本の三枚の鏡である。

日本国自<sub>レ</sub>神代<sub>ニ</sub>有三鏡<sub>一</sub>、璽之与<sub>レ</sub>劔而共伝来至<sub>レ</sub>今、一枚は在<sub>レ</sub>伊勢大神宮<sub>一</sub>、一枚は在<sub>レ</sub>紀伊国日前社<sub>一</sub>、一枚は在<sub>レ</sub>内裏内侍所<sub>一</sub>しかあればすなはち、国家みな鏡を伝持することあきらかなり。鏡をえたるは国をえたるなり。人つたふらくは、この三枚の鏡は、神位とおなじく伝来せり、天神より伝来せるを相伝す。しかあれば、百練の銅も陰陽の化成なり。今来今現、古来古現ならん。これ古今を照臨するは古鏡なるべし。

と述べる。わが日本国には神代から璽と劔とともに伝えられた三枚の鏡がある。伊勢大神宮の鏡、紀伊の国の日前社の鏡、内裏の内侍所の鏡、この三鏡である。国家はこの鏡を伝持するのであって、この三鏡は神位と同じく伝来してきた、天津神より伝えられたという。それゆえ、この三鏡は古今に來現して古今を照破する古鏡なのであるという。

道元禪師が、日本国の神鏡に關説するのはきわめて稀なことである。

注(1) 道元禪師は、中国禪林で愛用されていた『首楞嚴經』、『円覺經』を「見ることなかれ」と拒けている。「老子の言句を見ること勿れ。楞嚴・円覺の教典を見ること勿れ。(時の人楞嚴・円覺の教典を以て多く禪門の所依を謂へり。師常に之を嫌う)専ら七仏世尊より今日に至るまでの仏祖の因縁を學すべし。徒に名利の邪路を務めば、豈に是れ學道とせんや。如来世尊、迦



葉祖師、西天廿八祖、東土の六代、青原、南岳等、何れの祖師か楞嚴・円覚を用いて正法眼蔵涅槃妙心とする。また、いずれの祖師か孔子・老子の涕唾を嘗めて、仏祖の甘露とするものならんや」(原漢文。『永平広録』巻第五)と述べている。また、大鑑慧能の語録とされている有名な『六祖壇経』についても、『六祖壇経に見性の言あり。かの書、これ偽書なり。付法蔵の書にあらす。曹溪の言句にあらす。仏祖の児孫、またく依用せざる書なり』(『正法眼蔵四禪比丘』)として、『六祖壇経』を偽書と断じている。偽書といえは、直前の『首楞嚴経』、『円覚経』についても、すでにその指摘がなされている。望月信草博士によって『円覚経』が、『仏教経典成立史論』、常盤大定博士によって『首楞嚴経』が、『統支那仏教の研究』、それぞれ偽経とされた。道元禪師と『首楞嚴経』、『円覚経』、『六祖壇経』の関係で何がどのよう問題となるかという点については、鏡島元隆博士著『道元禪師と引用経典・語録の研究』(木耳社刊)を参照されたい。

(2) 道元禪師と曹洞宗という宗名、洞山宗の呼称の問題およびこれらについての扱いを初期日本曹洞宗団において検討した一端を、私はすでに発表している。拙稿「伝光録の成立」(七)、「4・本文内容について」の「a、曹洞宗の宗名について」の項(駒沢女子短期大学「研究紀要」第22号)を参照された